

オーダーメイド医療

誤嚥性肺炎をくり返し、嚥下が困難で胃ろうを増設しなければならない患者さんの奥さんをお願いして、故郷訪問させていただいた。家の中で奥さんは旦那さんとの思い出など話してくださった。「やさしい人でした、よくしてくれる人でした、いろんなことに気がつく人でした。病室でいつも言うんです、よくなったらまた一緒に指相撲しましょうね。今はあまり動かない手を握ると、私の方が指相撲で勝ってしまうんです。また家に帰って夫婦喧嘩しましょうね。そんなこと毎日ベッドの横で話してるんです。先生私、少しでも長く一緒にいたいんです。胃ろうを造ってもらっても少しでも一緒にいる時間が長くなるいいと思っています。」

僕は胃ろうについて今まで個人的には否定的な意見しかもっていなかった。人間自ら食べられなくなったらそれで生物学的に終わりだと思っていた。胃ろうは延命処置の一つとさえ思っていた。でもそんな奥さんの言葉をきいて、胃ろうが一概に悪いものでないと考えさせられた。その患者さん、その家族にとって一番幸せな選択は何か。ガイドラインにのっていない各患者さんのニーズに応じた治療が必要なんだろうと感じた。この1カ月で患者の思い、家族の思いを大切に医療に触れることができたと思い、これからの医師人生に大きな意味をもつ体験できたと思っている。(杉浦)



6月から紀南病院で研修させていただいている三重大学病院研修医の加藤です。ここに来てからいつの間にか3週間が経ちました。入院患者さんが多く、あっという間に毎日が過ぎていきます。大学病院の研修とは違い、いつどんな患者さんに会おうか分からないという環境の中、先生方・看護師さんをはじめスタッフの方々に助けを求めながらなんとか過ごしています。なにしろ方向音痴、機械音痴の私は病院の構造と電子カルテを覚えることが一番の試練です……。(2週間近く病棟から宿舎へのルートを遠回りしていました。教えてくださった看護師さんありがとうございます)

初めての週末は、熊野古道ツアーに出かけました。「みんなで歩きましょう」と誘われ、早朝から気軽に出かけていった研修医4人。古道歩きというところのある響きですが、山あり山あり……でお昼前には息が切れて足が震えてきました。それでも後半になると慣れてきたのかだんだん疲れなくなり、途中の綺麗な景色に癒されながらおよそ8時間、27kmの道のりを歩きました。普段ほとんど運動をしていなかったで途中でリタイヤしないかと心配だったのですが、引き返さないと分かっていると案外歩けるものですね。最後は熊野大社でお礼参りをして帰ってきました。

私の紀南病院での研修は7月末まで続きます。まだまだ慣れないところもたくさんありますが、病院の皆様よろしくお願ひいたします。

6月よりお世話になっています研修医2年目の福田晋也です。

3週間経ち、高温多湿の気候・そんなにきつくない関西弁・美味しい料理に囲まれて広すぎる部屋で過ごしています。病院では救急外来など、日々勉強が足りないことを実感させられていますが、一番は、職種問わずみなさん人数が少ないせいか、自分で考え一人で仕事をされていて責任感の違いを感じました。人が多いとどうしても自分の仕事がベルトコンベアーの一部になり全体像を見渡すこともなく結局知らぬ間に終わっていることが多かったです。大学病院で寝そべっていた私としては反省です。

病院以外では、大自然の中健康的な暮らしができやせると思っていたのですが、料理大変美味しいんですね。おかげさまでマタニティーです。6月はW杯もあり室内にいたことが多かったのですが、7月は海やグランドに顔を出せればと思っています。古道はさすがにもう…笑

8年間東京にいたせいで関西弁を忘れてしまいこちらに来てから東京イントネーションの関西弁が気持ち悪いですが、残り1ヶ月頑張っていきたいと思います。よろしくお願ひします。

神武天皇は八咫鳥によって熊野から大和に入る険阻な山中を導かれたという。私たちの果てしない熊野古道歩きは、きつながらも古道部長さんに誘導される道ある旅であった。

私は今月で3カ月の地域医療研修を終えた。振りかえれば自身の研修病院と違うことがたくさんあり、戸惑うことがしばしばあった。今までなら分からないことはすぐに専門の先生に聞きに走り、さらっと教えてもらおう答えが、本をひっくりかえし、頭をかかえないと出てこない。専門医が少ない地域医療においてはいかに幅広く、そして深い知識が問われるかということを実感し、勉強不足を反省させられる日々であった。残された研修期間、誘導してくれる鳥、答えを教える鳥がない険しい道のりも自分でズンズンと進んでいけるような力を身につけたい。そして辛いことがあったら、あの熊野古道歩きのしんどさを思い出すとんでもらなでもがなされる気がしてきた。(鈴木)